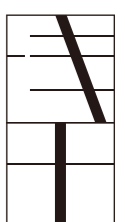


唯々庵



遅き日のつもりで遠きむかし哉

敷地は昭和30年から40年代に開発された住宅街に位置する。
上宮天満宮の杜に面して淀川水系の平野を望む高台は、
喧嘩から離れた穏やかな自然の雰囲気があり、
既存の住まいに残る数寄屋の気配と共に
安田虚心の南画家らしい嗜好を感じさせる。



暮れなずむ長い春の一日、つれづれのうちに昔のことが思い出される。過去の或る一日も今日のよりに過ぎ、同じように過ぎ去っていったそのような日々が積み積もって、今から振り返れば、いつしか遠い昔になってしまったものだ。

— 未来の私が経験するであろう「遅き日」には、今日という日もまた「遅きむかし」に感じられるようになるのだという、予感の表現になっており、「遅き日」という今を中心に、過去と未来に無限につながる時間を、その流れのままに表現されている。